

《新刊紹介》

川越宗一著『熱源』 文藝春秋、2019.8

～直木賞受賞によせて



直木賞にアイヌ主人公の「熱源」～研究者は期待とともに指摘も



「熱源」に登場する人物は多くが実在し、これらの人たちを長年、研究してきた北海道大学の井上紘一名誉教授は「受賞おめでとうと申し上げたい。弱者や故郷を失った人たちを描くその姿勢を評価したいし、今後の活動にも期待したい」と述べました。

ただ、作品には現実にはない登場人物同士の会話などフィクションで描かれた場面が複数あるとし「作品をいかに面白くするかという努力を否定しないが、フィクションを入れるならば、何らかの形で創作であることを示してほしい」と述べて、一般の読者が誤った歴史の解釈をしないためにも説明を尽くすべきではないかと指摘しました。(NHK 札幌放送局 WEB、2020.1.15)

フィクションと史実の間で

新井 藤子

まずこの度は誠にめでたいこと、著者川越宗一氏に心よりお祝いを申し上げます。

受賞を寿ぐ多くの報道の中、NHK 札幌の記事では、史実を取り扱う手法について井上氏の批判的な指摘も取り上げられました。それは情報社会における読み手の捉え方、また知識を得る手法について一石を投じるものといえます。歴史小説におけるフィクション性については、本作の内容にとどまらず、人間の心や頭の中の自由な創造性について有意義な思考や議論が展開できると感じます。

本書においてフィクションという言葉は、史実に触れた際、どの段階でイメージーションを触発され、それが発動するかを見極める指標ともいえます。

本書でイメージーション発動の手立て、著者の「熱源」となったものは、プロニスワフ・ピウスツキに限っていえば、おもに 1970 年代以降、多くの研究者によって掘り起こされた情報で、それらはイメージーションの介在を最大限まで抑えて構築された史実ですが、そこでも必ず研究者の視座によるバイアスは免れません。

一般に史実は、特にイベント性のない史実は、実は熱をさますような性質ももっており、場合によっては見過ごしてしまうほど楽しくはないものです。必ずしも後世の人々の熱い期待に応えるために出来てはおらず、場合によっては著者も終始魂の熱いままに描き続けたわけではないのかもしれませんが。

作中のピウスツキのように、熱とは、誰もが己の感動をもって見出すエネルギーとみられます。皆、さまざまな生を各々ただ生き抜いたに過ぎないかもしれないのに、そこに熱が求められるからこそ、実在の人物に史実と異なる動きをさせ創造というダイナミズムに昇華させたといえます。

またこの作品は、川越氏が自分の中に力強く抱

えた不動のテーマでもって必死にさぐり当て、手練り寄せて作った物語であることは疑いがありません。

その意味で、NHK の記事にもある、本書について「期待とともに指摘も」という言葉は理性的であると評価できます。この情報社会でいかなる立場の人々も自分だけの独りよがり陥らずに感動をもつことの素晴らしさ、また読み手一人一人が自分で考え、時には調べるなどして知を涵養できるポテンシャルに溢れていると思います。

今ほど、学術研究分野と創作創造分野を跨いだ議論が必要とされる時代はないとも感じます。

本書は読み手にとって意味ある熱源を与え続ける手立てになると想像できます。

また、単なる受け身や鵜呑みにとどまらせぬよう力強い言葉を紡いだ井上氏にも、史実を花開かせた方として心よりお祝いを申し上げます。

(あらい・ふじこ、2020.1.16)

ポエ協会員、必読の一冊

長屋 のり子

本作は、直木賞を受賞、つづいて本屋大賞を受賞するという快挙を為した。二〇一九年夏に刊行されて、この四月も尚、殆ど小説部門のトップを快走している、奇貨と呼ぶべきベストセラー作品。作者川越宗一は、第一作『天地に燦たり』で松本清張賞を受賞している。『熱源』は彼の第二作。弱冠四十二才にしてのこの荣誉。思想の骨組の頑丈な、しかも抒情性に溢れる並々でないストーリーテラーである。『熱源』も、意図的に劇画風に、しかし精緻細密に組み立てられている。圧倒的筆致。

序章にロシア赤軍女性兵士が登場。(彼女は大学で民族学を専攻。蠟管録音で、樺太(サハリン)アイヌの五弦楽器らしい琴の演奏を聴く。一私たちは滅びゆく民と言われていますーアイヌの掠れた男の声も聴く。)この設定を伏線として美しい終章を生む。(一九四五

年八月、このトンコリの演奏者イペカラと戦場で遭遇する。そして筒管から響いた言葉が蘇る。—もしあなたと私達の子孫が出会うことがあれば、それがこの場にいる私達の出会ひのような幸せなものでありますように—アイヌ叙事詩。) 四二六頁に及ぶ壮大な、この歴史小説は紙背にこうした詩と音楽を潜めて魅惑を極める。

第一章「帰還」は一八七六年に始まる物語。樺太(サハリン)アイヌ、山辺安之助(ヤヨマネクフ)、花守信吉(シシラトカ)の北海道対雁(ついしかり)への移住。美少女を巡る二人の清々しい格闘。日本同化教育の圧力、蔑視、憐憫。劣悪な環境にコレラと疱瘡が蔓延して困窮に追い討ちがかかる。天然痘で妻も逝く。石狩に死者を焼く野辺送りの火が絶えない。艱難の果て、故郷樺太に漂流して帰還する安之助(ヤヨマネクフ)。

第二章「サハリン島」帝政ロシア政治犯流刑人としてやってくるポーランド人、ブロニスワフ・ピウスツキの詳細な物語。政治犯となるまでの経緯。絶望の流刑地での、ギリヤークとの交流、信義・信頼を熱源とする彼の蘇生。支配されるべき民などいない確信。

第三章「録(しる)されたもの」樺太(サハリン)アイヌ部落頭領バフンケの姪、チュフサンマとの婚約、結婚、出産。バフンケの養女、五弦琴(トンコリ)の名手イペカラもピウスツキを恋慕する。

第四章「日出づる国」日露戦争の勃発。戦争はいつも弱者に悲惨だ。外来勢力に翻弄される樺太(サハリン)アイヌ社会！眼を瞠るのが、この章の登場人物の多彩。二葉亭四迷、大隈重信、レーニン、ゲンダーヌ…。ピウスツキの出逢う誰もがデフォルメされた熱を持つ。彼らの熱量が溢れ出て読者はその熱さの感覚を共有する。母国の独立戦争のために妻子を残して樺太(サハリン)を去るピウスツキ。弟ユゼフ(独立後のポーランド国元帥)との深い葛藤。

第五章「故郷」では、帝大生金田一京助も登場(余話として、石川啄木さえも…)してアイヌのハウキ、ユーカラをギリシャ叙事詩に拮抗するものと安之助(ヤヨマネクフ)に陶然と賞賛する。掉尾を飾るのは山辺安之助(ヤヨマネクフ)と花守信吉(シシラトカ)の白瀬南極探検隊への壮烈な挺身。アイヌ存在の意義を生命賭して確かめる。一方ピウスツキは、大隈重信に「人の世界の摂理なら、人が変えられる。摂理と闘う」という強い言葉を托して、共和国運動の抗争中に撃たれて墜死する。パリ、セーヌ川で自死という史実を小説は乖離して推理を自在に舞う。奔放な飛躍。死体を一つ自殺に偽装するくらいわけないさ—の政敵の科白を一行刻んで。小説は正にロマン。

終章「熱源」序章の女性兵士とイペカラとの邂逅。

序章との呼応の息呑む秀麗。ピウスツキが蠟管に録した叙事詩が戦場の無残荒廃の中で澄んで立ち上る。胸に響交う。同様、五章、安之助(ヤヨマネクフ)の言葉も亦、読者の胸を去らない。—アイヌって言葉は、人って意味なんですよ。強いも弱いも、優れるも劣るもない。生まれたから、生きてゆくのだ。すべてを引き受け、あるいは補いあつて。生まれたのだから、生きていい筈だ。自分が誰かということさえ知っていれば、そこに人(アイヌ)は生きている。それが摂理であつて欲しい。—

主要登場人物の誰もが、その地を「熱源」と感じた「樺太(サハリン)」。ポ文協会員、必読の一冊。

(ながや・のりこ)

樺太への熱い思い

尾形 芳秀

『熱源』は、サハリン・樺太時代に生きたアイヌ民族をめぐる人間模様を描いた作品である。

時あたかも「アイヌ新法」が制定され、今年には白老町にウポポイ(民族共生象徴空間)国立アイヌ民族博物館と国立民族共生公園が開場する。そういう意味ではタイムリーな出版であり、同時にこの時代のサハリン・樺太の一端を知る入門書となろう。

物語は、唐突ではあるが 1945 年の大戦末期に樺太が最後の戦場となり、ドイツ戦線から転戦してきたソ連軍の女性狙撃手の回想から始まる。そしてこのプロローグはエピローグに受け継がれる。

次いで第一～五章は樺太アイヌと関わった実在の人物に関する書物から大半を引用して展開する。その中で作者のオリジナルといえるのは、それらの書物の読後の感想のかたちで、アイヌ民族の立場への共感を代弁している個所であろう。この作品の『熱源』というタイトルにも、樺太アイヌの故郷回帰への熱い思いが込められている。

作者はこの作品を、実在の人物をモチーフにしたフィクションとしているが、樺太時代を多少なりとも知る者としては、違和感もある。

サハリン・樺太時代の背景について、日ロの領有の経緯やサハリン島時代には先住民族に加え流刑囚の島でもあったことをもっと知るべきだろう。

中でもポーランドからは、政治犯と呼ばれる人々が、流刑囚にも、ロシア軍兵士にも、その他教育者等にも数多くいたのである。決してブロニスワフ・ピウスツキだけではなかったのだ。

また、1875 年から全島がロシア領となって、アイヌ民族は日本人に近いという立場から島を強制退去させられ、彼らのアイデンティティは時代の波に翻弄されることになった。

作品では、当時の書物の引用のため、現在では使われない表記もみられる。当時の表記に忠実はよいが、初めて読む人に誤解は与えないだろうか。

サハリン島時代、ロシアはこの島を沿海州管轄下のサハリン州とし、州都を島の北部のアレクサンドロフスク管区におき、流刑開拓地としてティモフスク管区、南部のコルサコフ管区の三管区制とした。町らしいものはアレクサンドロフスクとコルサコフのみで、その間を結ぶ海路の中継港としてマウカがあるだけだった。町を一步出ると商店も宿泊施設もない流刑開拓地の世界だった。ときには、開拓を放棄した野盗が横行することもあった。

物語の舞台の島南部では、コルサコフ管区の流

刑囚による開拓地はナイバ川までで、それも道となく管区を一步出ると泥濘の道だけだった。つまり島全体が自然の監獄だったのだ。トンナイチャ集落からアイ集落までの移動には獣道しかなく、直線距離で 100km もあり、アイヌ民族とて遠く離れた集落との往来は容易ではなかった。本作の日露戦争におけるトンナイチャ湖畔やナイバ川での戦闘の描写も気になる。

ピウスツキはアイ集落を研究拠点とした。この地域を治めていたバフンケ・エカシは樺太時代にも人格者として知られていた。ピウスツキが妻子を残して島を去るシーンや、パリで死ぬシーンも、諸説あるが、描き方に違和感が残った。(おがた・よしひで)

沢田和彦著『ブロニスワフ・ピウスツキ伝』 成文社、2019.12

井上 紘一

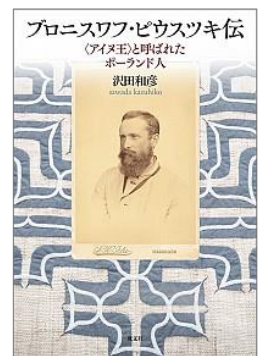
世界初の単著評伝

本書は澤田和彦埼玉大学名誉教授が 36 年の研鑽を経て上梓されたピウスツキ評伝。B・ピウスツキ(1866~1918)はリトワニア⇒ペテルブルグ⇒サハリン⇒浦塩⇒日本⇒米国⇒ガリツィア(奥領ポーランド)⇒スイス⇒パリを遍歴し、地球周回をほぼ果たした旅人ですから、一人の著者が彼の全生涯を攔筆するのは至難の業でした。なるほどヴラヂスラフ・ラティシェフ氏の優れたピウスツキ伝(露文、2008)や澤田・井上共編評伝(英露波文、全2巻、2010)は既刊ですが、前者はサハリン期までの評伝、後者は専門家 13 名の論文集です。したがって澤田氏の単著評伝は世界初の快挙にほかなりません。

同書はまた 1979 年春に札幌の赤提灯で発足した「ピウスツキ業績復元評価委員会」(CRAP、1981 年以降は同国際委員会 ICRAP)が掲げた事業計画の第 4 項「評伝出版」を成就する壮挙でもあります。日本におけるピウスツキ事績の研究者として 1983 年に ICRAP に参加されて以降、澤田氏は調査研究を孜々として展開、多くの著述を公刊されました。それらは本書の骨格をなしています。

評伝は序章、第一~十四章、終章の 16 章構成。ピウスツキの出生から死に至るまで 51 年余りの生涯を時系列に沿って叙述しています。中でも圧巻は第九章「日本滞在」と第十章「ピウスツキの観た日本と日本人」、全体の 4 分の 1 弱(計 93 頁)を占めます。澤田氏はピウスツキが第 4 回滞日中(1905.12~1906.8)に際会した 100 名超の日本人を掘り起こし、とどのつまりは日露戦争直後の世相描出にも成功しています。この明治 39 年頃の日本文

化・日本人論は氏の博覧強記、真実探究の執念、語学力の所産にほかならず、澤田氏にして初めて可能となった独創的労作というべきでしょう。ですから、せめて両章だけでも早急に英訳され、海外へ向けて発信されるよう願ってやみません。



終章「その後のアイヌ家族」は、ピウスツキがサハリンに残したアイヌ妻チュフサンマとその家族(子息木村助造、その妹大谷キヨ)の「その後」を簡潔に紹介しています。私の試算によれば、彼らの子孫(日本における「ピウスツキ家」に関わる人々)は現在 40 余名を数え、全員が日本で暮らしておられます。

ギリヤークの少女ヴニト

第三章「サハリン島流刑」の一節「ギリヤークの少女ヴニト」(84-86 頁)は、ニヴフの女流詩人ヴニトとピウスツキの恋愛関係に捧げられています。ヴニトがブロニスワフの子を宿し、彼の離島後に娘のヴァイを出産したとの風聞は種々伝えられていましたが、澤田氏はそれを初めて集成・公刊されたわけです。1897~99 年の出来事でした。つまりヴァイはブロニスワフがもうけた第一子にほかなりません。2019 年 8 月、私は北サハリン東海岸のノグリキにて、ヴァイの曾孫を名乗る 3 人の女性と対話する機会に恵まれました。彼女らがヴァイの末裔である事実は一族の伝承などで承知していたが、ヴニトとピウスツキにまで遡及すると知ったのはごく最近のことだそうです。曾孫の一人イリーナ・オネンコさんは自著『北サハリンとアムール流域の原住少数民族が

利用する植物』(2016)で家族史に言及しています。私は目下、その折に聴取した情報にもとづく家系図を作成中です。

本年1月、川越宗一氏が『熱源』で直木賞を取り、受賞後のインタビューでは「嘘をたくさんついた」と恐縮して見せました。小説家の性として、史実にもとづくといふながらも読者の受けを狙って捏造を弄することはやむを得ないかも知れません。川越氏は事実、同書の主人公の一人であるブロニスワフ・ピウスツキをめぐる数多の嘘をつきました。幾つかは人の名誉にかかわる頗る重大で深刻な捏造(フィクション)です。心ある読者は是非とも、川越氏の嘘を看破するべく時宜を得て公刊された澤田氏の『ピウスツキ伝』を繙いてください。その際は拙編訳書『ピウスツキのサハリン民族誌』(2019)*も参照いただけると幸甚です。(いのうえ・こういち)

* <http://hdl.handle.net/10097/00123171>

越野 剛

ピウスツキ顕彰の国際的機運

ブロニスワフ・ピウスツキはアイヌ研究で知られるポーランド人の民族学者である。ロシア統治下のリトアニアに生まれ、ツァーリ暗殺を計画する革命家のグループに与した罪を問われてサハリンに流刑となり、その地でニブフ(本書では旧称ギリヤークが用いられる)やアイヌなどの原住民の生活に関心を持った。その後、日本、アメリカを経て、ヨーロッパを転々する数奇な生涯を送る。弟のユゼフの指導する新生ポーランドが久しく失われていた国家の独立を達成するのは、ピウスツキが大戦下のパリで自死してからわずか半年後のことだった。

ピウスツキの名前は今年度の直木賞を受賞した川越宗一の『熱源』によって広く読書人の話題に上った。その背景には彼を顕彰する機運が国際的な研究者のネットワークの間で高まってきたことがあり、沢田和彦氏はその立役者の一人といえる。ポーランド、サハリン、日本などの世界各地に残された資料を丹念に調査して書き上げられたのが、ここに紹介する『ブロニスワフ・ピウスツキ伝』なのである。

不思議な陰影、複雑なドラマ

小説『熱源』は学究肌の人物をあえてハードボイルドな熱血漢として描くことで感動的な物語を提示した。それに対して沢田の伝記はフィクションを排し、記録に基づいて実像に迫るのだが、そうするとピウスツキの人物像にある種々の不思議な陰影が浮かび出すのが興味深い。ここではその例として、先住民

族と日本人に主人公が抱いた関心について見よう。

ピウスツキがサハリンの先住民族によりそのような共感を示したのは、彼自身がロシア帝国に支配されたリトアニア・ポーランドの出身だからというのはわかりやすい。実際、ニブフやアイヌの生活向上、教育や医療の支援を熱心に行っている。その一方で先住民族の生活や言語文化は知的な関心の対象でもあり、その学術的な功績のおかげで流刑地サハリンから「脱出」することができたといえる。さらにピウスツキに恋愛抒情詩を捧げたというニブフの少女ヴニトや、結婚して子供までもうけたアイヌ女性チュフサンマなどのように、先住民族はロマンスの相手でもありえた。このような位相の異なる動機や関心がピウスツキの中で混然一体となっており、明確な線を引いて区別することができないように感じられるのだ。

ピウスツキの半年あまりの日本滞在についても同じことが観察できる。ここは日露交流史の大家である沢田氏の力量がもっとも発揮された部分であろう。遍歴の民族学者は日本社会の様々な側面に興味を示しながら、とりわけ女性の問題を熱心に取材している。日本の女性に向けたピウスツキのまなざしには、社会主義や婦人解放運動への共感と人類学的な関心が入り混じり、おそらくはロマンスへの希求とも無縁ではない。その点で注目されるのが当時の先端技術であった写真である。ピウスツキは、音楽家の橘糸重や中国の留学生で革命運動に関わった呉弱男といった女性に会った際に彼女たちの写真を所望している。当時の社会で女性が肖像写真を贈るという行為は、かなり親密な間柄でなければありえなかっただろうことは本書でも指摘されている。写真を収集する動機が何であったかははっきりしていない以上、沢田氏は余計な推測を重ねることはしていない。ただし流刑地サハリンでの生活を扱った章で紹介されているように、そもそもピウスツキが撮影技術を学んだのは民族学調査に用いるためであった。ここでもアジアの女性に対する関心の中に、社会的弱者との連帯、学術調査という狙い、そしてセクシャルな欲望とがひとつに解け合っているのではないか。

ピウスツキの伝記から読み取れるのは、帝政ロシアの権力に対する憎悪と恐怖、遠い故郷を思う寂しさと異郷への憧れ、社交性と憂鬱といった複雑な性格のドラマなのである。沢田氏の渉獵した豊かな資料の海から浮かび上がる豊かな人間性こそが本書の醍醐味であろう。(こしの・ごう)

『週刊読書人』(2020年3月27日号)掲載*

* <https://dokushojin.com/article.html?i=6814>